

2006年（ワ）第6484号

謝罪及び損害賠償請求事件

原告 王 子雄 外39名

被告 日 本 国

意 見 陳 述 書

2007年12月17日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国重慶市沙坪区公園14号7-4

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 錢 方 能

1 私は錢方能と申します。1930年4月19日生まれで、現在77歳です（別紙1参照）。

1939年5月、私は9歳でしたが、日本軍の爆撃を受けて一緒に住んでいた祖父を殺されました。同じ爆撃で私自身も重傷を負いました。

また同時に、私たち家族が住んでいた住居も爆撃で破壊されてしまいました。こうして私たち家族は、日本軍の爆撃のために、突然、郊外に転居することになりました。

2 1939年5月当時、私の家族は、祖父の錢正光、父錢兆金、母何叔徳、兄錢方訓と私の5人で、重慶市内に住んでいました。私は9歳になったばかり

りでした。兄弟には、もともと次兄と妹がいたのですが、次兄は6歳の時に病気で亡くなり、妹も2歳のときに病死しました。

私は重慶市中区儲奇門で生まれましたが、私が5歳の頃に祖父銭正光が買った近くの四合院造りの家に引っ越しました。その建物は入口に大きな門があり、中庭、両側の部屋と中央の部屋などもあって、敷地内には全部で18もの部屋がありました（別紙2参照）。

私の家があった場所は、和平路の裏の通りで韭菜葉路地の一番奥から2軒目でした（別紙3参照）。

家にはお手伝いさんも一緒に住んでいましたし、また何人かの人に部屋を貸していました。

祖父は、清朝の時代には五品官という役職を得て政府に仕えていました。とても気丈な人でした。父は弁護士で、爆撃までは心橋法律事務所を開設して法律の仕事をする傍ら、自宅で小さな私塾を開き近所の子供を教育していました。母は主婦で家事のために忙しく働いていました。

こうして私たち家族は重慶で平穏に暮らしていました。

3 日本軍による重慶爆撃は、祖父が殺される以前から始まっていました。

私は地元の中心小学校に通っていましたが、日本軍の飛行機が重慶にやってくると度に、兄に連れられて揚子江の川向こうの南山に小舟で避難していました。

私は、祖父が殺される前、避難先の南山から、日本軍機が重慶市内に爆弾を落とすところを目撃しました。爆弾が落ちてくると大きな破裂音が聞こえ、そのすぐ後に重慶の街に赤い火の手が上がるのが見えました。私は、この体験以降、爆撃がとても怖くなり、日本軍機が近づくとこれまで以上に急いで避難するようになりました。

4 1939年5月の3日と4日、連続して日本軍機による大規模な重慶大爆撃がありました。祖父が爆撃で殺されたのは5月4日でした。

3日は、昼頃に日本軍機がやってきました。私は、避難するため自宅近くの浄水場の側の防空洞に行きました（別紙4参照）。この日の爆撃はこれまでにない大規模なものでした。

4日は、両親が朝から重慶市郊外の上橋というところにある親戚の家に出かけて留守でした。私は、午前中から前日に行った防空洞に避難していました。しかし、夕方近くになり、もう日本軍の飛行機が爆撃してくる可能性はないだろうと思って家に戻りました。ところが午後6時過ぎ頃、日本軍が重慶市内に対して猛爆撃を始めました。祖父と兄と私とお手伝いの何祖徳さんは逃げ遅れてしまいました。

兄が中央の部屋にある一番大きなテーブルの上に何枚か布団を敷いてくれ、私達はそのテーブルの下に潜ることにしました。しかし祖父は70歳の高齢でしたのでテーブルの下に潜ることを嫌がり潜りませんでした。

その後、突然、雷のようなものすごい音が聞こえました。家の左側の棟に爆弾が命中し瓦礫が飛び散りました。飛び散った瓦礫が私の額をえぐり、長さ10cm、幅5～6cmの傷口ができて骨まで見え、かなり出血しました。私の傷口を兄が衣服で押さえてくれました（別紙5参照）。

一緒にテーブルの下に避難したお手伝いの何祖徳さんは、左手の薬指に爆発で飛び散った瓦礫の破片が突き刺さり大怪我をし、このため今も指をまっすぐ伸ばすことができません。

5 私の家族の中で、テーブルの下に潜って生き残った兄と私とお手伝いさんの3人は、数時間後やっと瓦礫の家の下から這い出ることが出来ました。

家の中は爆撃によるほこりと煙がたちこめて息をするのが大変でしたが、テーブルの下から出た後は地面に座って夜明けを待ちました。その間、テ

ーブルの下に潜らなかった祖父を一所懸命捜しましたが、爆撃にやられたらしく祖父の姿は見えず、声も聞こえませんでした。

また私の家の左側の部屋は、郵便局の職員をしていた人の家族に貸していたのですが、この家族全員も爆撃を受けて瓦礫の下敷きになり死亡しました。

生き残った私たち3人は、5月5日の朝に家を離れました。結局、祖父の遺体は見つかりませんでした。当時9歳の私は怖くて泣くことしかできませんでした。

私達3人は何も持たず通遠門を後にしました。朝のうちに重慶郊外の上橋の華岩寺の近くに住んでいる親戚の家にとどり着き、その後はこの家で避難生活を送りました（別紙6参照）。

兄の銭方訓は、その後1941年の8月23日、重慶市郊外の奉節県で再び日本軍の爆撃を受けました。兄はその当時四川省銀行奉節事務所で主任として働いていましたが、日本軍は兄が働いていた銀行にも爆弾を落としました。この爆撃で、兄は全ての財産を失いました。

- 6** 私は1949年（当時19歳）に高校を卒業しました。その年の11月に重慶が解放されました。私は中国人民解放軍に参加し、第二野戦軍軍政大学で兵士として服役しました。1951年5月に青島市海軍航空兵学校に転勤し機械の専門講師となりました。1年後、研修助手、助教授、教官にもなりました。1956年に少尉になりました。

在職期間中、1959年に上海の大場飛行場で飛行練習台を作るために学校が私を上海に派遣しました。私ともう一名の教員とで中国初の飛行練習台を作りました。この飛行練習台は北京で開かれた建国10周年のお祝いの会で贈り物とされ、国家技術発明・開発一等甲獎を獲得し、私たちは大きな功勞を受けました。それ以外に私は航空学校に在職中、数多くの発明・開発賞をもらいました。

こうして12年間人民解放軍にいた後、私は1961年に退役し、重慶の実家に戻り、「技師」と「高級建築見積師」として重慶渝西建設会社に勤めてきました。現在も、社会貢献のためこの会社で仕事をしています。

- 7 私たちは爆撃被害者は、「真相・正義・索賠・和平」という目標を掲げています。すなわち、加害者日本国に重慶大爆撃の事実を認めさせ、正義の尊さを明らかにするとともに、被害者に謝罪と賠償を実行させて平和を実現する、という目標です。この裁判もこの目標を実現するための闘いの一部です。**

重慶大爆撃を体験した爆撃被害者たちは、現在ほとんどの人が70歳台後半から90歳台になりました。私たちは歴史の証人です。私たち重慶大爆撃の被害者は、決して爆撃の悲惨な事実を忘れることはできません。

私たち被害者は、重慶大爆撃の悲惨な事実を正しく記録し、世界中の人々と後世に真実を伝えていく責任を負っています。

現在、重慶大爆撃から60余年が経ちましたが、重慶大爆撃の無差別爆撃による中国人被害者の賠償問題は、いまだに解決されていません。これ以上、この問題を先送りにしてはなりません。これ以上の先送りは爆撃被害者に対する新たな加害行為であり、重大な人権侵害です。

私が重慶を出発する前日、重慶大爆撃の被害者たちは、爆撃記念碑の前で70人以上の重慶大爆撃の被害者たちが集まって歓送会を開いてくれました（別紙7参照）。この法廷で裁判官に述べた私の想いは、歓送会に集まってくれた重慶大爆撃の被害者全員の想いでもあります。

私たち爆撃被害者は、日本政府が加害者日本国を代表して、重慶大爆撃の罪を認めて一刻も早く爆撃被害者に謝罪と賠償を行うように心から求めます。

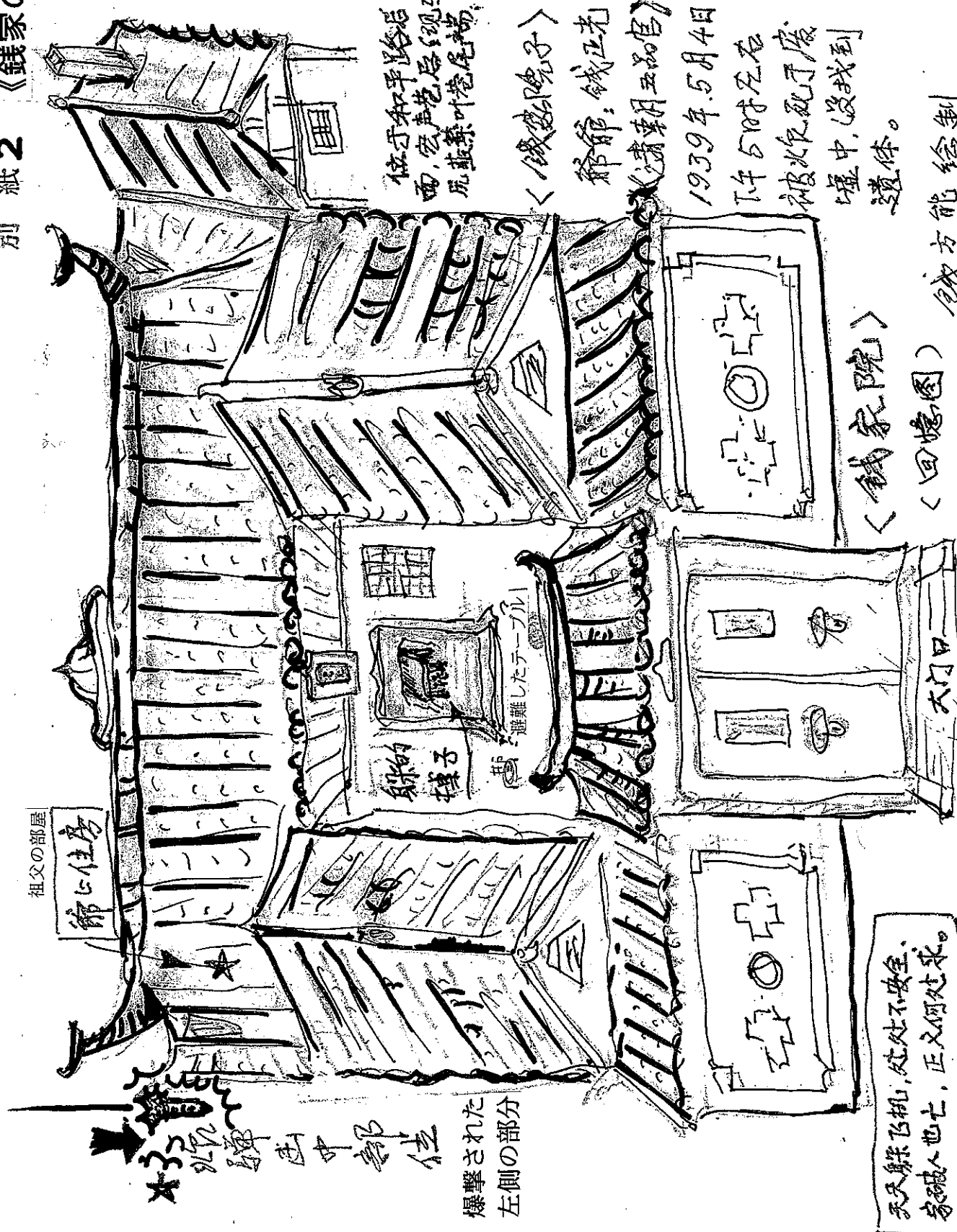
以 上



DSC_0326.JPG

原告 錢 方 能

別紙2 《銭家の家屋》



祖父の部屋

館に住居

★333
弾出中部位

爆撃された
左側の部分

躲的
様子

避難したテラス

位于和平路后
西, 宏声巷居(现在)
阮葉葉叶巷尾端

〈銭家院子〉

館前, 钱正光

清朝五品官

1939年5月4日

下午5時左右

被炸死于廢

墟中, 没找到

遗体。

〈銭家院〉

〈回憶圖〉

銭方能绘制

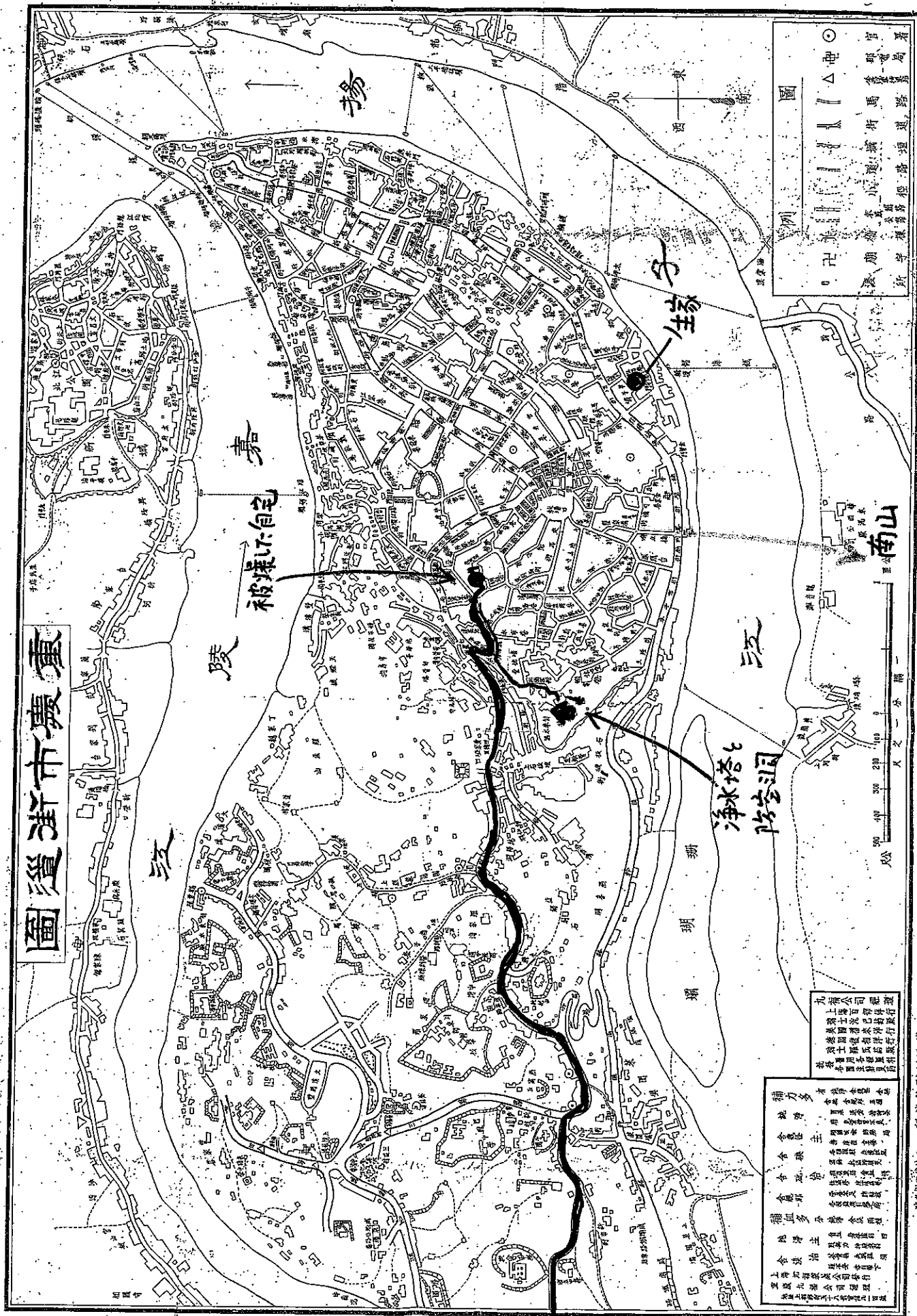
2007.12.17.

天天躲飞机, 处处不安全,
家破人亡, 正又何处求。

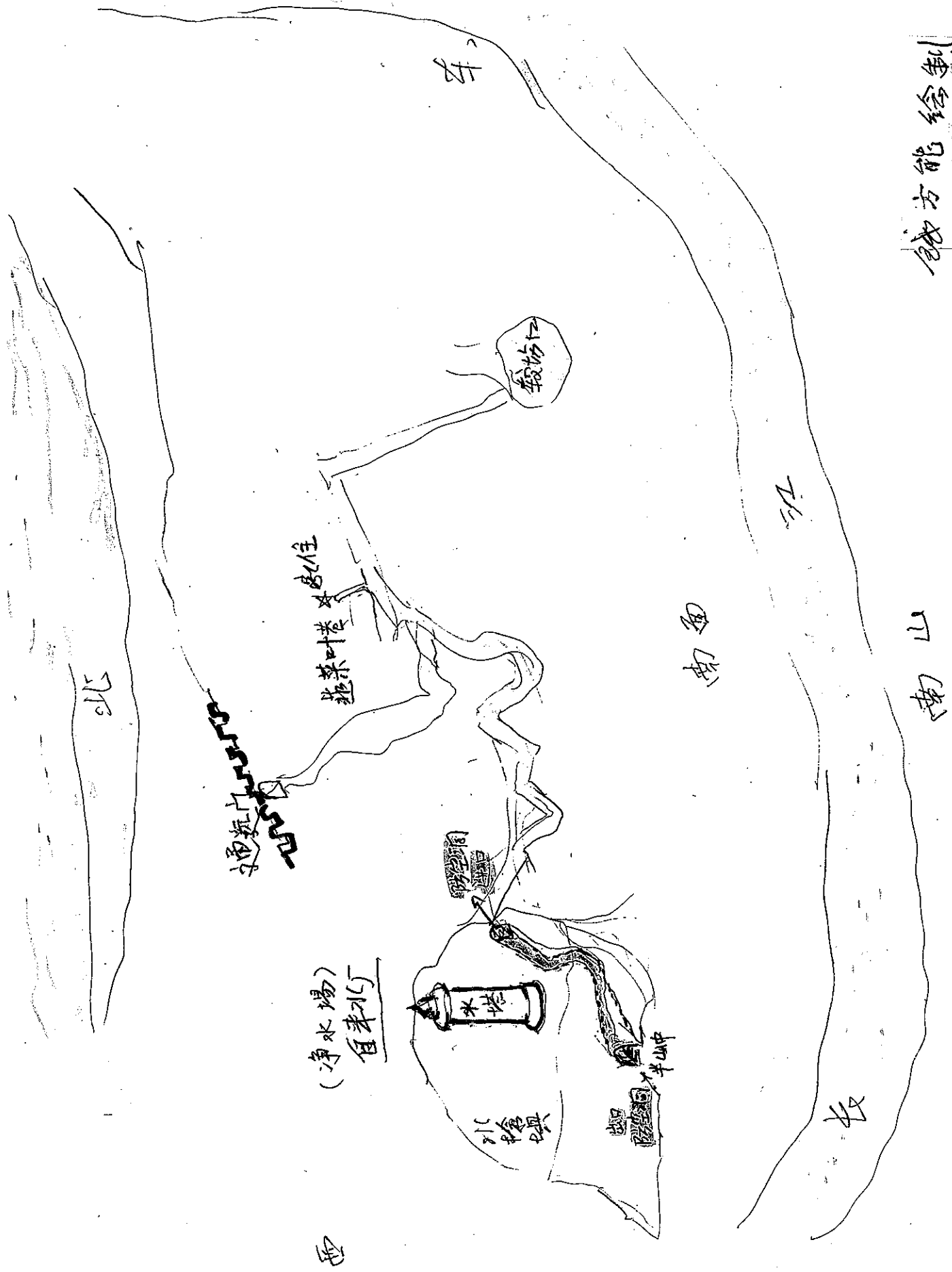
毎日日本軍の飛行機に襲われてどこに行っても
安全ではなかった。人が亡くなり家もなくし正
義というものはどこにあるのか！

現在の和平路と宏声
巷の裏。当時の韭菜
菜路地の奥から2軒
目の家。

清朝の五品官を勤め
た祖父錢正光は19
39年5月4日の午
後5時頃に爆撃を受
けて亡くなった。
遺体は瓦礫の下敷き
となって探し出せな
かった。



庭難所 上橋領 <華岩寺>

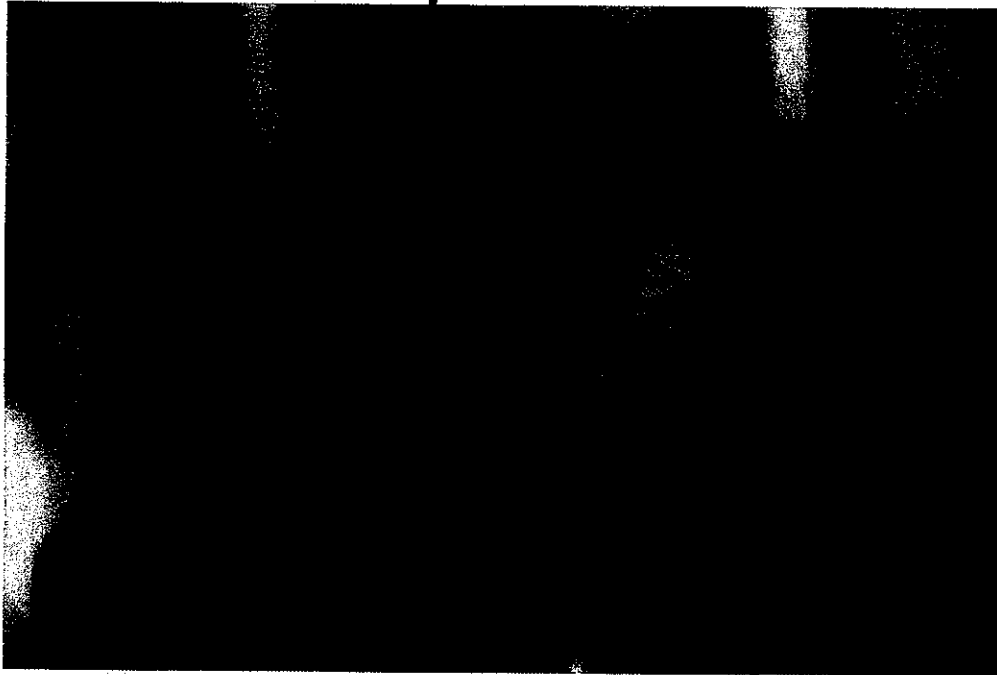


威方龍繪制

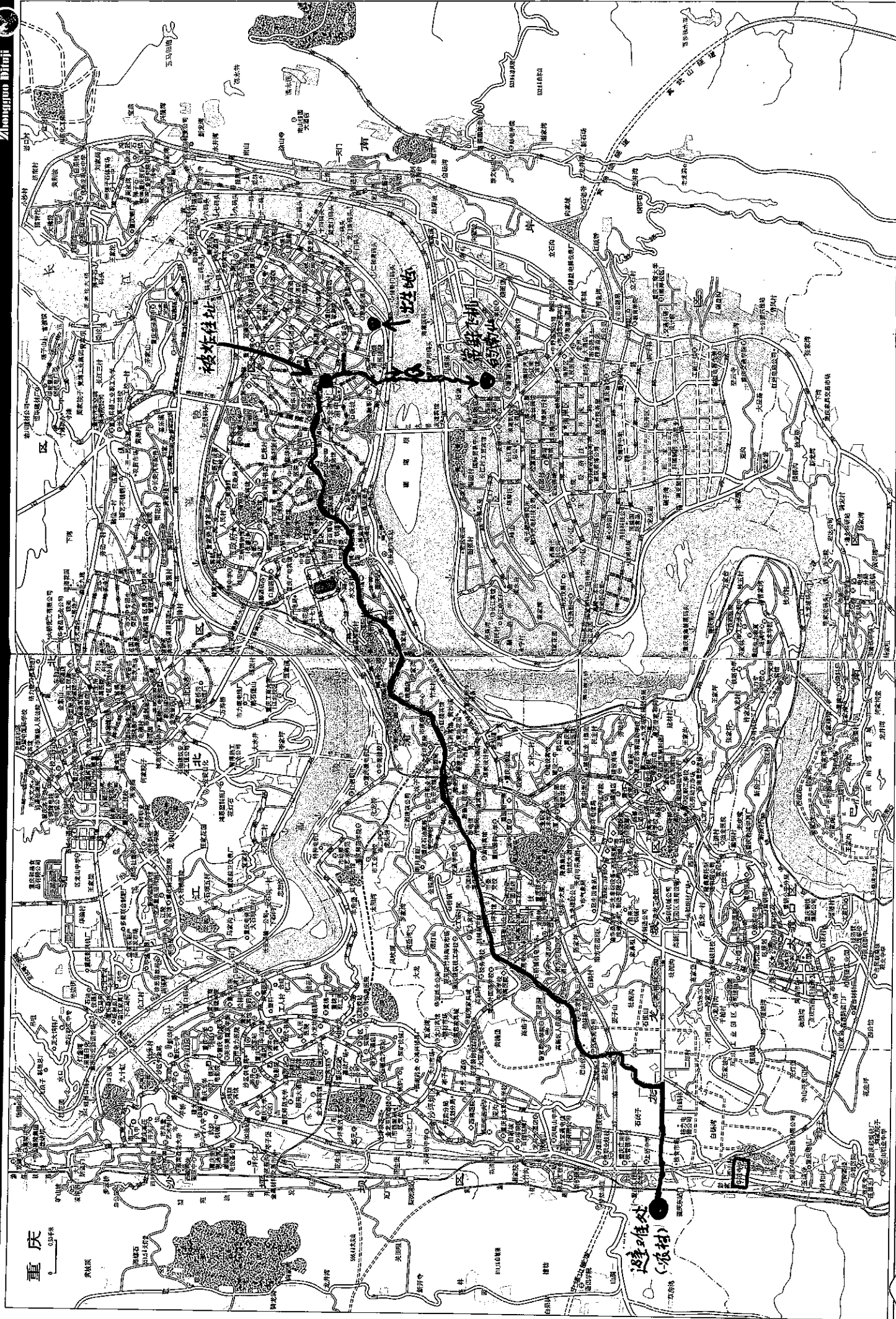
2007. 12. 17.

負傷した箇所

別紙 5



DSC_0325.JPG





RECO0002 013_0001.jpg



RECO0007 002_0001.jpg



RECO0008 002_0001.jpg



RECO0009_0001.jpg